
彼女の僕への想いは変わらないと思っていた…。
そう思っていたのに…
R-18版
ひろっち

彼女の僕への想いは変わらないと思っていた……。

そう思っていたのに……。

ひろっち

プロローグ　……四
第一章：自信と戸惑いの境界線　……五
第二章：嘘から始まった試練　……十一
第三章：無防備な快楽の代償　……二十三
第四章：覚醒する肉体　ー剛の教育ー　……二十九
第五章：初めてのフェラチオ　ー嘘と本能ー　……五十
第六章：陥落の調律　ー目隠しの深淵ー　……六十四
第七章：崩壊と絶望　……八十六
エピローグ　……九十七

【ご注意】

この物語は、登場人物の未熟さや、心のすれ違いが引き起こす悲劇を描いています。
一部、直接的な表現はありませんが、性的な描写や、道徳的に許容できない行動が含まれますのでご注意ください。

プロローグ

「さようなら……」

その言葉がメッセージの最後に書かれていた。
私、相田美樹はスマホの画面を見ながら、自分のしてしまったことへの後悔と、
彼氏、響宏への怒りで身体が震えていた。
美樹はあふれる涙を止めるかのように星空を見上げ、
先ほどまで彼とは違う男から自分に与え続けられた快楽で火照った体を抱きしめ、
行き場のない怒りを言葉に出して叫ぶことしかできなかった。

「私がこうなったのは、もとはと言えばヒロが原因でしょ！」
「自分に自信があったなら最後まで責任とってよねっ……！」
「ヒロのばか！……」
「連絡しているのに、なんで無視するのよ！」

上を向くだけでは耐えきれなくなった涙が、頬を流れ白いブラウスの襟元を濡らしていった。

第一章：自信と戸惑いの境界線

とある田舎の高校二年生の教室、そこにはいつもと変わらない光景があった。
美樹の幼馴染、兼恋人の響宏は、机の上に立って、一人、熱演をしていた。

「この体に流れる熱き、清らかなるコスモ、これは何人たりとも汚し、消すことができない！」

高校二年生にもなって、中二病全開の彼氏に呆れながら、友達といつもの会話をしていた。

「ねぇ、美樹、よりによって、なんであんなの彼氏にしたのさぁ……」
「あれ、どうみてもバカじゃん……」
「そうだよ、美樹、今からでも遅くないよ。青春は一度だよ……」

そう、次々に美樹を心配する友達との会話も、いつもの光景だった。
美樹は、学年でも一、二位を争う、人気者で裏表がなく、明るくて優しく、側にいる人を温かくすることができる。
セミロングの茶色の髪の毛、クリッとした瞳、着やせするタイプだが、

出るところはきちんと出て、締まる所は十分に締まっている。
そう、モデルさながらのスタイルをしている。
宏との関係を知る男たちからは、あんなのでもＯＫなら、と頻繁に告白されては、皆が撃沈している。

「美樹ってさぁ、結構告白とかされているのに、どうしてあんな奴と続けているの……？」

と、当然の疑問に、

「私、ヒロのこと、大好きなの……。なんて表現していいか分からないけど……。
それだけは何があっても絶対に変わらないの……」

という、これもいつもながらの回答に、友達は、両手を広げて『もうお手上げ』という仕草をしていた。

ある日の放課後、美樹と宏は帰り道の途中にある、田舎ならではの雰囲気の喫茶店にいた。



「ねえ、ヒロ、今日も言われたよ……。なんであんなのと付き合っているのかって……」
目の前で本を読んでいる宏にむかって、話をするも当の本人はラノベに夢中で、
その言葉が耳に入っていない。

「ねぇ、聞いてる？」

我関せずで、興味を示さない宏の様子に、頬を膨らまし不服全開の美樹は、

「この間、柔道部の三年生に告白されちゃったんだ……」
「すごく体の大きな人で……。その割には優しそうな顔をしてるんだ……」

その言葉に、宏はこの日、初めて美樹の話に反応した。

「君は何もわかっていない、君と俺は、心の奥底で、フォースでつながっている」
「何人たりとも、そのつながりを壊すことはできない……」

相変わらずのその返答に、『はい、はい……』と答えるも、しばらくして、

「そんなに自信があるなら、試してみる……」
「私、ＯＫしちゃうようっ……」

宏は、その言葉に顔色一つ変えず、

「ああ、試してみるといい、そうすれば俺の偉大さに気付くことになる……」
「分かった、じゃあ、ヒロとは一旦今日でおしまいねっ……」

あまりの、あっさりとした物言いに宏は、戸惑いながらも美樹がそんなことをするはずがないと、高を括っていた。

（だ、大丈夫だよなぁ、俺たちなんだかんだ付き合い長いし、体の相性もいいって言っていたし……）

美樹と、宏の初体験は、高校一年の入学式の夜だった、その日は勢いで済ませてしまったけど、それ以来、何度も肌を重ねている。

（『大丈夫、大丈夫……』そんなぽっと出のやつに自分たちの関係が壊されるはずがない）
と宏は思っていた。
エッチの時の幸せそうに俺を見つめる表情……。最後に決まって言ってくれる言葉……。

（ヒロとのエッチ、なんかこう、あったかくって、ときどきゾクゾクってくる感覚が、もどかしくってそれが好きなんだよねぇ）

宏は、美樹のこれまでの様子を振り返り、根拠のない自信で不安をかき消そうとしていた。

（もう、ヒロったらぁ……。本当に付き合っちゃうからね……）
（あとで泣きついてきても知らないから……）
（まあでも……一度痛い目に遭った方がいいんだよ、ヒロは……！）

次の日の放課後、掃除もせずに相変わらず机の上で中二病全開の彼を見ていた、美樹に、

「ねえ、いい加減、考え直したら……。あんなのどこがいいのさぁ……」

いつもながらの会話だったのだが、その日の美樹の回答は意外なものだった。

「うん、私、ヒロとは昨日別れたんだ……。で、三年生の柔道部の先輩と付き合うことにしたの……」

「今日、これから返事をして、そのまま放課後デートするかもねっ……」

「今まで、心配してくれてありがとうね……。それじゃあ行ってくるね……」

そのあまりに意外な美樹からの言葉に、周りが一瞬、停止した。

「そ、そう……なの……」

美樹の突然の心変わりに女友達もそれしか言葉が出なかったようだった。

例にもれず、机の上の宏もそうだった。

（えっ、今なんていった……。美樹が柔道部の先輩と……付き合うって……。あの時の言葉って、ほんとの話だったの……）